



〈連載〉小論文ブックポート 55

●溝上慎一著 (有斐閣アルマ 定価1680円〈税込〉)

『大学生の学び・入門』

大学での勉強は役に立つ!』

受験までは大学に合格することだけを考え、やりたいことは入学してから考えよう、という人は少なくない。ところが大学に入っても勉強する目的が今一つ見えず、気がつけば3年後期、就活(就職活動)で何も語れない自分に愕然する人もまた、少なくない。このようなパターンに陥らないために、今から大学での学びと日常生活を展望することが大切になる。

そこで今号は溝上慎一著『大学生の学び・入門 大学での勉強は役に立つ!』(有斐閣アルマ)を取り上げる。著者は気鋭の青年心理学の研究者。本誌でも何回か登場いただいたが、現在は京都大学高等教育研究開発推進センターで大学教育の開発・改善に取り組んでいる。

日常の勉強に将来展望が見える

本書は大学生の学びについて「認識編」と「行動編」の2つの観点を示したものである。今回は「認識編」を主に見ていく。

今、多くの大学は教育改革のさ中であり、学生たちをできるだけ「勉強」させる方向になっている。例えば出席チェックや厳格な成績管理など大学教育の改善により、学生たちを授業に出席させるようにはなっている。だが現実には学生が「身を入れて勉強している姿とは必ずしもなっていない」と著者は指摘する。一昔前ならば「とにかく大学に入ったら何とかなる」という学生は少なくなかったし、それであからさまに困ることはなかった。だが今、この意識で大学

へ入り、何も考えずに好き勝手に大学生生活を過ごす「大変なことになる」と、著者は言う。

学生たちが勉強に身を入れられない理由の一つとして共通するものに、自らの将来の仕事と関連する「やりたいことがわからない」がある。これに対して著者は、「そのときそのときのレベルでいいから機会あることに将来像を考え続ける」ことを提案する。

これは「絵の下描きのような作業」だ。高校生ならば高校生の、大学生ならば大学生のレベルで構わないので自分が将来やりたいことを思い描く。高校生から大学1・2年生と将来像を描き続けて修正しつつ、やがて3・4年生の就職活動の時期に本格的な形にするのである。

もちろん、高校生の時に描いていたことが大学で崩れることも少なくない。しかしそれを著者は「ごく普通のこと」と見る。受験勉強とは異なる様々な勉強をするなかで世界観が広がり、描いていた将来像が幼稚で非現実的だったと思うようになり、もう一度じっくりと考え直そうと思うようになるからだ。それは自然なことである。新しい将来像を描き直せばいいのである。

重要なのは、将来やりたいことを実際に実現しているかどうかの「行動的次元」であり、それは「主として勉強に表れる」と著者は分析する。そこには、勉強という活動から突き出る「将来への時間軸」が見えるからである。

この場合の「勉強」とは主に「正課の勉強」を指す。授業について自分なりに理解し、課題をしっかり考える。さらに「そこから自分で本を読んだり友人と勉強会をしたり、講演会に出かけたり、インターシップやイベントに参加したりするなど、勉強の幅を積極的に広げる」というタイプの勉強だ。それは「いわれることだけを黙々

とこなす」受け身の勉強や、学生が安易に飛びつきがちな資格取得のための勉強ではない。「生涯自分の頭でものを考えそれを実行していく、少しずつでも自分を発展させる」ための勉強であり、「ある問題や事物に対して自分なりの見方や考え方をもちつことのできるようになる」勉強なのだ。

むろん、ただ勉強ばかりしていればいいというわけではない。目指すべきは、クラブやサークル、アルバイト、趣味なども楽しみながら、将来に向けてやることもしっかりやる姿である。大学生になると、勉強以外にも様々な「やりたいいこと」「誘惑」が増える。それでも「勉強という苦行に立ち向かう行為こそ、将来に向けて自分ほどこれだけ本気であるかという思いが込められている」と著者は言う。そのためには「生活を組織化し、タイム・マネジメントを行うとい

う、かなり自覚的な努力と忍耐力が必要」なのである。

本書後半の「行動編」には、勉強と日常生活をどうやりくりしていけばいいのか具体的なアドバイスが多く、非常に参考になる。

大学での勉強を社会につなげる

企業の新卒採用では、大学の勉強は問われずに様々な経験や人間性が問われる。だから大学での勉強は役に立たない——こうした見方は日本の社会で広く流布しているが、著者は教育社会学の知見なども踏まえ、「大学での勉強は将来役に立つ」と断言する。

例えばその一つが、企業が近年重視する「コンピテンシー」能力である。例えば教育社会学の小方直幸氏は、コンピテンシーを氷山の「顕在部分(知識技能・態度)」と水面下の「潜在部分(自己概念・価値観、性格、動機)」になぞらえて説明する。

小方氏が日本経団連の「新卒採用に関するアンケート」を分析した結果、新卒採用時には「コミュニケーション能力」や「チャレンジ精神」「主体性」「協調性」などが重視されると答えられるものの、

採用後に仕事を力強く押し進める能力としては、「問題を発見する能力」「行動力・実行力」「つねに新しい知識・経験・学力を身につけようとする力」「論理的に考えられる力」が重視されると結論づけられた。入社後に必要な能力はコンピテンシーの「潜在部分」に相当する。これらは大学の勉強によって培われる能力なのである。

また、別の研究からは、「大学で熱心に勉強に取り組むという習慣」が就職後の勉強に結びつき、就職後のキャリアを規定することが明らかにされている。これらから著者は、「子ども時代からのたゆまぬ努力が、後にじわりじわりと効いてくる」と述べている。

それでも勉強に向かいにくい学生に向けて著者は、大学での勉強が、どう「将来につながっていくのか」「つなげていくのか」に問いを置きかえることを勧める。実際、多くの大学では社会と勉強との「つながり」を見いだす場を増やしている。工学部の「創成科目」や、教員養成系学部での教育実習の充実、企業や官公庁などでのインターシップなどキャリア形成支援の拡大などがある。

そうした機会のない大学・学部の学生に対して著者は、「自分で社会や現場に飛び出すこと」を提案する。本書では、学内で様々なイベントを企画した学生の声や、インターシップを行った学生の声が複数、紹介されている。例えば「法律を浮世離れたもの」と感じていたある法学部生は、アメリカ・コロラド州上院の元でインターシップに参加し、「法律の一つ一つに意味があり、市民生活を左右している」と感じ、帰国後に大学での法律の授業を積極的に受けるようになったという。自ら社会と勉強を「つなげる」大切さがよくわかるところである。

これら現代の大学生の勉強やキャリア形成に関するテーマを話し合うのが、京大高等教育研究開発推進センターと電通育英会が共催して例年夏に行われる「大学生研究フォーラム」である。高校での進路指導が大学生のキャリア意識の形成にどう影響しているのか、大学教育がどう変化しているのかを知る貴重な機会なので、ぜひご参加いただきたい。(詳細は <http://www.dentsu-ikeikai.or.jp/> を参照のこと)。(評＝福永文子)